

ノテンキだった藤原伊織 (1948.02.17~2007.05.17)

藤原伊織（本名＝利一）に筆者が初めて出会ったのは1973年4月1日のことだった。大学を卒業して広告代理店に就職したその日のことである。4月1日から1ヶ月間、この代理店は新入社員の研修に入る。研修は10人ぐらいのグループに分かれて、それぞれのグループに昨年入社したサブリーダーと、入社10年近くになるリーダーが各1人ずつ付いて、社内の諸々の習慣やルール、さらには社内の希望配属先等を決めてゆくシステムになっている。この研修グループが筆者と藤原は、たまたま一緒だったのである。

彼は東京大学文学部フランス文学科卒で、エリート中のエリートではあったが、そんな印象は全くなかった。学生時代は、東大安田講堂に立てこもって昼寝ばかりしていたらしい。あの歌手になった加藤登紀子や、あの裁判官をお前呼ばわりしたゲバルトローザと呼ばれた女性も、安田講堂で機動隊と相対した1969年1月、同じ時である。しかし彼にはもともとセクトの論理や、ゲバ棒持って機動隊に突っ込んでゆくような闘争心は持ち合わせていない。とはいえ、学外の周辺でマージャンとアルバイトばかりやっているほど、墮落もしていない。そんな彼自身のことを藤原は、後年全共闘ボヘミアン派と称していた。彼の言うボヘミアンの意味は定かではないが、ボヘミア人はもともと定住しない民族で、かつてはジプシーと呼ばれていたこともあり、いわば流浪の民であったが、やがて西スラブ人としてチェコ界隈に定住するようになった民族集団である。その特徴は自由奔放な生活を好み、伝統や習慣にこだわらない傾向が強かった。このためボヘミアン・アーティストと呼ばれる一団は、世間に背を向けて自由闊達な活動を行う者も多く、藤原はこのような集団を目指していたのかもしれない。しかし当時の学生たちはどこの大学でも同じ問題を突きつけられており、学生は大学の周辺をウロウロしていたのである。筆者は早稲田大学文学部だったが、ここは全共闘革マル派の拠点。入学してから2年間ほど、授業らしい授業はほとんどなかった。そんな時代の空気を多かれ少なかれ吸いながら、皆この代理店に就職してきたのである。

当時はノンポリと総称された学生運動に対する無関心派も少なくなかったが、学内ではどちらかという肩身が狭かった。しかし代理店にはむしろそんな輩が多かった。そのためか極楽トンボというニックネームがはやって、藤原もそう呼ばれていたように記憶している。同じ班の人間は、飯を食うのも酒を飲みに行くのも、最初のうちは全員一緒に、大学時代のことや付き合っている女性の話、時には故郷のことなどを語り合った。男ばかり10人ほどのグループにあって藤原は、いつも陽気だったが、彼は関西支社への配属が既に決まっており、彼女と別れて任地に赴くことになるので、そのことがしばしば話題に上っていた。後で分かったことだが、彼は当時まだ20歳そこそこの日米ハーフの美人歌手と同棲していた

のである。なんとも温厚で飄々とした風貌と、母性本能をくすぐる彼のノーテンキな性格が、若い美人の心を捉えたのだろう。納得できるような気がする。この歌手はNHKの紅白歌合戦にもジーンズ姿で出場したこともある。

藤原の得意分野は、もっぱら酒と競馬とマージャンで、この他の話はあまり聞いたことがない。タバコの煙をくゆらせながら、賭け事の話に熱っぽく語ることが多かった。したがってサルトルとかボーボワールとかいう単語は、彼の口から飛び出すこともなかったし、およそフランス文学を匂わせるようなこともなかった。ただ会社のそばにロンシャンという喫茶店があって、同じ班の人間は良く昼飯後にここでお茶を飲んだ。誰かが「ロンシャンで何だ？」と言うと、藤原は、「**パリにロンシャンと言う競馬場があったような気がするな。**」と言った。まさにその通だった。そして4月末、彼は後ろ髪を引かれながら、関西へと旅立って行った。

20年近くを関西で暮らした彼は、その地で結婚をして家庭を持ち、バブルが収まり出した不況の最中に東京へ戻ってきた。そして営業職に配属されたが、奇しくも筆者と同じ部局だった。関西在住時代『ダックスフンドのワープ』で、スバル文学賞を既に受賞しており、たまたま当時、筆者の姪が大学の文学部受験で、志望していた学部におすすめ者を入れる項目があったため、藤原に「君の名前、入れさせてもらっていいかい？」と聞くと、二つ返事でOKだった。彼にはそんな細かいことには、こだわらない側面があった。これは誰に対しても分け隔てはなく、新入社員時代から10年以上が経っても変わることもなかった。その後、間もなく彼は営業からクリエイティブ部門に異動となった。彼が希望してのことだったが、クリエイティブでは大きな成果を残すことはできなかった。広告コピーの世界と、文学の世界では、当然スタンスが異なる。お得意先の意にかなうキャッチコピーはそうそう簡単に出来るものでもないし、作る側が惚れ込んでも、得意先が難色を示せばそれまでである。広告の世界ではスポンサーが絶対だったからである。彼もこの時代は仕事場でも苦悩している状態だったが、経済的にも困窮していた。もともと賭け事が酒と同じぐらいに好きだった藤原は、バブル時代に株式に投資してバブル破綻後、大きな損失をこうむり、「**退職金を前借するか、一発何かで当てないと、やってゆけないよ。**」とぼやいていたのである。こんなところも彼はノーテンキそのものだった。しかしこの当時40代から50代のサラリーマンは、多かれ少なかれバブルの後遺症に悩まされていた。自らの投資で失敗した者、会社の投資が焦げ付き人員整理等に出くわした者、貸付資金等が回収できなくなった金融機関など、日本経済はここから立ち直るのに20年の歳月を要した。政府も日銀もあまりに無能で、景気回復への手立てを、とうの昔に失っていたし、デフレの恐ろしさを知る者は、政府にも日銀にもいなかった。そもそも近代国家が成立して以来、世界中でデフレを経験した先進国はなかつただろう。どこの国でも当時はインフレのみを恐れていたのである。一方、藤原といえばこれが機になって、

賞金目当てに小説を書き始めた。朝5時頃には起きて書いていたらしく、それから出勤して来るといふ話を聞いたことがある。これが他でもない彼の名を、一躍不動のものとしたあの『テロリストのパラソル』だったのである。平成7年度(1995年)の『第41回江戸川乱歩賞』に輝いたばかりか、翌年の『第114回直木賞』をも受賞した。同じ作品がこの両賞を受賞したのは藤原伊織が初めてのことで、マスコミでも大きく取り上げられて、彼はスター作家にのし上がるとともに、借金の返済を果たして、晴れて自由の身となったのである。

その後、藤原は二足のワラジを履いて、本業のコピーライターと作家業を継続していたが、間もなく広報室に異動。やがてアルバイトの方が忙しくなって、平成14年(2002年)には、6年余り履き続けた二足のうち、古いワラジを脱いで、会社を早期退職したのである。そしてしばしばマージャンや、競馬予想など週刊誌上をにぎわすこととなった。併せて作家活動に没頭していった。

あるとき筆者は『テロリストのパラソル』を読み始めた。テンポのよい文章で読みやすかった。ワンセンテンスが短かめで、ぐいぐいと読み込んでゆくことが出来た。そればかりか、会話部分が多く、まるでシナリオを読んでいるようで、情景が頭を横切ってゆくような錯覚さえ覚えた。しかもこの会話は、常に“ああ言えば、こう言う”で、その“こう言う”の部分が物語を一層のことテンポよく展開させる上に、気の効いた返答になっていた。それこそ会話部分だけでもかなり楽しめる内容になっていたのである。野球にたとえるなら彼の会話は、まさに切れ味のいいカーブや落差の大きなドロップ、そして時には意表をつくフォークという具合で、ストレートは滅多に投げない。その小気味良いコントロールが、読者を堪能させてくれる。この点は他の藤原作品でも共通しており、恐らくこの会話の気の効いた巧みさは、日本の作家の中でも軍を抜くものであったと思う。さらに難しい表現や回りくどい修飾語は一切ない。ただところどころに気の効いた表現が巧みにちりばめられていた。これこそが彼がコピーライターとして数年間を広告代理店で過ごしたことによって獲得した、表現技術の『技』のような気がした。何とも巧みな文章表現になっていたのである。こんな表現があった。

『彼女は私を見つめた。そのとき突然、その目に涙の粒がふくれあがった。みるみるうちにそれは表面張力の限界を越えた。頬に流れ、尾を引いて静かにおちた。まっすぐにおちていった。私は黙ったまま、それを眺めていた。園堂優子。彼女もこんなふうに泣いたことがある。ただ一度だけ泣いたことがある。ぼんやりそんなことを考えた。』

そして筆者はしばしば物語の登場人物と、現実の彼との人間関係を推測していた。しかし正直言って、大学時代を一緒にすごしていない筆者には分からなかった。しかし主人公である島村圭介=本名菊池俊彦は彼の姿に間違いなかった。大阪の出身であること、東京大学文学部仏文科の出身であること、身長175cmほどであること等によるものであるが、大学時代の東大闘争への関わり方も、全共闘ボヘミアン

派と言うにふさわしい部分を感じられるものだった。恐らく藤原は、このアル中寸前の中年男の人格に、彼のあらゆる DNA を注入しているようにも見えた。まずノーテンキ。この言葉はざっと見ただけで、最初の 6 ブロックだけでも、10 回ほど目にとまる。全部を数えれば 20 回を超えていることだろう。そしてアル中寸前。藤原はアル中ほどではなかったが、昼間から酒を飲むタイプではあった。それに『音痴』といったところであろうか。彼がシャンソンを口ずさむところなど見たこともなかった。とはいえ彼が音楽の世界に疎かったというわけではない。むしろ彼にジャズを語らせたなら恐らく一晩中語り続けていたことだろう。長編 3 作目となる『てのひらの闇』(1999 年 10 月文芸春秋刊)の作品内には、BGM として登場するさまざまな楽曲が、的確な説明を加えながら紹介されている。またパソコンがあまり得意ではないこと、これも藤原と同様である。『テロリストのパラソル』の原稿でもワープロもパソコンも使用していない。ただこれも初期の段階のことで、やがてパソコンにも明るくなったのか、他作品のストーリーにはパソコンはしばしば登場するようになり、メールアドレスも持つようになっていた。

この時代、我々普通のサラリーマンには、パソコンは買えなかった。30 万円以上だったからである。買ったのは 10 万円前後のワープロだったが、機能的には単なるタイプライターみたいなもので、悪筆者が手紙やはがきを書くのに重宝する程度の代物だったから、むしろ割高だったかもしれない。そんなことよりも、『テロリスト』の中には新入社員当時の藤原とは隔たったボクシングや株式投資など異なった側面がのぞく。新興経済ヤクザ興和商事の浅井志郎から「あんた株やるか」と聴かれて、「やるわけないだろ。経済にはうといんだ。資金もない」と応じている。しかしこの浅井という男に、藤原のここに到る軌跡でもあった株式の知識をかなり吹き込んでいる。ファルテックという東証 2 部上場企業のデータを会社四季報からコピーして、「有価証券報告書があればもっと詳しくわかるが、とりあえずはこれでアウトラインぐらいはつかめるだろう」と言わせているのである。主人公はとことんノーテンキであるものの、この経済ヤクザは賢く、また良く知恵が廻る。あるいはこの男に藤原の持っている『知』の部分を重ね合わせているのかもしれない。マネーロンダリング(資金洗浄)や企業の PER(株価収益率)、さらには 5%ルールなど、アレッという言葉がこの浅井の口から飛び出す。そしてこのヤクザには仁義にのっとりた行動範囲があった。新入社員の頃の藤原とは、また別の人格がそこにはあったが、その追求はさておき、浅井という経済ヤクザの登場で、このストーリーは縦横にも、また天地にも厚みが増して、この物語を一層のこと重層にしているように見える。それだけでも彼の株式投資の失敗は、十二分にカバーしきれたように思う。島村の親友だった桑野は、島村がボクシングをやっていた頃、堀田産業でアルバイトをしていて主任にまでなる。この堀田産業が外資から資本を注入されてファルテックと言う会社になったと言う発想も、彼の株式知識から

生まれたものだったのだろう。彼の株式の知識ナシにはこの作品の最後のどんでん返しも、生まれていなかったように思われるのである。

しかし筆者にはただ一つだけ不可解な点が残る。それは新宿中央公園の爆破現場が、都庁の東側だと記している点である。『都庁の45階にある展望台にいた観覧客の話もあった。その高さは202メートルとある。それなら公園のすべてを俯瞰できたはずだが、客たちは地響きと大きな揺れから地震ではないかと思い、全員がパニックに襲われたという。足元の事件に気づき、公園に面した東側窓に群がったのは爆発後数分たってからだった。向かいにあるホテルの高層階にいたものも同様だった。』としているのである。地図で見れば一目瞭然な位置を藤原は何故間違えたのだろうか。実はこれには理由があった。藤原がそもそもこのテロリストの構想を得たのは1971年12月24日のクリスマスツリー爆弾だと語っていたことがあった。この事件は、伊勢丹新宿本店のすぐ向かい側にあった四谷警察署追分派出所で、クリスマスツリーに仕掛けられた爆弾が爆発し、警察官一人が亡くなり、通行人11人が重軽傷を負った事件である。これは連合赤軍の仕業とも言われていたが、実際にはどのセクトにも属さず、過激な行動を繰り返していた『黒ヘル集団』の鎌田俊彦を中心としたグループの犯罪であることが判明した(鎌田はその後無期懲役確定)。そしてこの位置は都庁の東側に当る。藤原はテロリストの発想の原点となった伊勢丹前交差点と、このフィクションの設定である新宿中央公園とを、彼の頭脳の中で一瞬混同していたのだろう。このように解釈すればこの東西の間違いが理解できるように思う。

ただ藤原の間違いはもう一つある。これは長編第2作目となる『ひまわりの祝祭』(2000年5月講談社刊)の最後、4tトラックの燃料タンクが銃撃されて燃料が漏れ出し、この幌付きトラックが雨の中で炎上するシーンである。しかし4tトラックは通常ガソリン車ではなく軽油車であって、そうそう簡単に引火するものではない。しかも設定ではかなりの雨の中である。物語の展開が巧みだったが故に、画龍天晴を欠く感を免れない。どこかでこのトラックがガソリン車であったことを明記する必要があっただろう。

さて『テロリストのパラソル』で、島村の若き日の同棲相手であった園堂優子。彼女のことは一体誰なのか、さっぱり見当が付かなかった。藤原の実際の同棲相手とは、いささか異なっているものの、藤原は彼女のことを、『一種の破滅型とも呼ぶべき過激さで知られていた。そういつて悪ければ極端すぎる精神的前衛。』と評しており、この『精神的前衛』という部分においては、彼の最初の同棲相手と、ある種、共通する部分があるように見える。優子の父親が国会議員で大臣を数回勤めた男という話は虚構っぽくなくもない。しかし優子は実在する人物がモデルになっているのではなく、藤原が創造した人格のようにも思える。娘の松下塔子も同様であるが、塔子はむしろ優子のコピーと見るべきだろう。優子という女性は、

あるいは藤原が知っている何人かの女性像をコピーして、この女性に貼り付けたのかも知れない。とはいうものの得体の知れないこの女東大生には、不思議な妖気が漂う。藤原が形容した『**極端すぎる精神的前衛**』という言葉によって、さらに一層の輝きと行動力が付与されて、なんともいえない魅力を備えたインテリ女性に変貌している。これこそが彼の持つ独特の表現力と言うべきなのだろう。ただ彼女だけが良く登場するために、ひとときわ光っているだけに過ぎないともいえようか。この外の登場者それぞれには、全く異なった人格が付与されており、どいつもこいつも、物語を展開させてゆく上で、大事な役割を担っている。そして最後には全員がテロリストの下に集約されて行く筋立てになっている。

話はちょっと横道にそれるが、藤原の他の作品にもこの園藤優子に匹敵する美人で賢い女性が必ず登場する。そしてこの女性達はどれも極端にスリムという点でも一致している。藤原の女性観では、女性はスリムでなければ美人ではないのだろう。こうした女性は主人公の部下であったり、上司であったり、妻であったり、昔別れた恋人であったり、さまざまであるが、いわばこの賢くて美人の女性と主人公がセットになって、物語を切り盛りしてゆく。このことを記憶しておくことで事件の解決が見えてくることも多いようなので申し添えておきたい。そして主人公はこの島村のように酒びたりのアル中寸前の男が多く、どこかノーテンキといおうか、ま抜けたところがあることも共通している。藤原の自らの姿を投影させたものなのだろう。ただ長編2作目に当る『ひまわりの祝祭』の主人公である秋山秋二は珍しくアル中ではなく、牛乳ばかり飲んでいいる。第1作がアル中寸前だったため、2作目は異なった人格に設定したかったのだろう。もう一つこの園堂優子はお嬢様だが、彼の物語に登場する人間は、どちらかという生まれや素性がハッキリとしない人物も多い。主人公がヤクザの出身であったり、ヤクザの娘だったり、普通のサラリーマンの子息という設定は、むしろ多くはない。したがって不倫の末の子も少なくない。園堂優子の娘、松下塔子もその一人であり、『てのひらの闇』に登場する佐伯貴恵も同様である。また両親が離婚していたり、親の顔を見たことがなかったり、出生の秘密が物語の進展と共にどこかで明かされたり、日なたばかりが人生ではないことを、藤原は常に訴えているようでもある。しかしそんな不幸な生い立ちの登場人物に藤原は天賦の才を与えることや、ハッピーな結末を用意することも忘れていない。それは神様が雑草にも美しい一輪の花を咲かせることを忘れなかったのと似ている。この例外は『ひまわりの祝祭』に登場する加納麻里ぐらいではなかったろうか。また登場人物はどこかに皆それぞれの正義感を有している。幼い子供を裏切ったり、正義を貫いた者が不運に死んでゆくシーンを描くことも殆どない。ここに藤原のヒューマンな世界観が垣間見えるような気がしてならない。これを含めて彼は自分自身を「ノーテンキ」と言って揶揄しているのかもしれない。

藤原の作品には、いくつかのバックボーンがあるような気がする。その一つは

人間誰しもが年齢とともに人格を変えながら、この社会に適応して生きているという現実である。『ひまわりの祝祭』には、彼の作品には珍しく、多くの60歳以上の老人が登場する。この中で、

「酷な言い方をするね」

「とくに酷だとは思いませんね。ある人間への信頼を裏切ることのほうが酷じゃないんですか。もっともそれ以上に、時間が人を変える事実自体が残酷な現実なのかもしれない」

「どういうことだろう」

「かつて、社長はだれもが認める誠実な人間だった。だけど、もうそれは過去の歴史になっちゃった。そういうことです」

と言い、さらに何ページか後には

彼の顔からそれまでの余裕が消えた。はじめて見るいろがそのうえにあった。それは脅えだった。この男は村林のミスをひとりでかぶった際にも、その種の恐れを感じはしなかったはずだ。なのに、いまはちがう。まるで異なる人間に変質している。残酷なのは、時間の経過なのかもしれない。

と語り、時の流れの中で変貌してゆく人間の姿を、残酷なものとして描いている。さらに晩年2006年に発表した短編『まぼろしの虹』では、

淡々と語る島崎の口調に浩平が覚えたのは、歳月がもたらす風化だった。

とポツリと記しているのである。しかし藤原自身は時の経過の中で、その人格が変わることはなかった。他人のフリを見てわが身を戒めていたのかもしれない。

そしてもう一つの最大のバックボーンと言え「人生は賭け」だということだろうか。『ひまわりの祝祭』では、主人公の秋山秋二が、かつての上司であった村林の要請で、赤坂の非合法賭博場に行き、現金500万円を賭けて、どういうわけか、わざと負ける所から始る。そして主人公を除くすべての登場人物が、ゴッホの『ひまわり』を追いかける。主人公の亡くなった妻英子が、この絵を隠し持っていたと信じて、絵画を探すことに終始するという物語である。このストーリーの中で藤原は何度『賭け』と言う言葉を使ったろうか、数えることすら出来ない。人生はすべて『賭け』というのが、藤原の最大の人生観だったのかもしれない。彼が株式に投資したのも賭け、小説を書き出したのも賭け、そしてサラリーマンに見切りをつけたのも賭けだったのだろう。

さて話を元に戻すとして、ともかく『テロリスト』に登場する人物はあまり多くはない。事件が起こって、その事件の概要が語られ、園堂優子の娘、松下塔子に過去を語る形で、主人公の青春時代に場面は移行して、再び現在の主人公の周辺に戻る。そして松下塔子が物語の舵取りに参加して、この事件の話は進み、最初に登場した人物の詳細が語られ、どんでん返しの結論へと向かう。

たった4日間の物語だが、その描写は精緻で、短絡過ぎることもまた饒舌すぎる

こともなく展開してゆく。新宿中央公園で、昔の仲間 3 人がすれ違うと言う構成はあまりにも偶然過ぎる嫌いはあるものの、また主人公自身が推理して行く仮定で、この偶然過ぎる出会いを不可解だと指摘しているものの、その矛盾を感じさせないほどテンポよく話は進んでゆく。しかも主だった登場人物はすべてインテリであり、深い過去の暗闇を背負って生きている。特に新宿の地下街で暮らすホームレスが数名登場するが、アメリカでの生活を経験したことがある若者、法医学の原書を読む老人、藤原は人生は何が契機で、転落したり、這い上がって来たり、人間が背負って歩く人生とは、人それぞれなんだとも言いたげである。そんなものは表面的な問題であって、人間の人格そのものとは無関係だとも、言いたかったのだろう。ここにも藤原自身の人生観そのものが投影されているように見える。

爆発事件で死んだと思われていた彼の学生時代の親友桑野が現れて、登場人物すべてが、この桑野と何らかの関連性を持っていたことが、島村によって暴かれてゆく。この物語の終結は実に見事な構成だと思った。一方、桑野は島村との空白の 22 年間に埋める話を始めた。そしてここで明らかにされたのは桑野の島村に対する敗北者意識と、園堂優子への強い愛と憧憬であった。桑野は結局人生なんて、男と女。男にとって大事なことは勝つか負けるか、つまり金を掴めるか、掴めないか、ここに掛かるとも言いたげだった。かつて桑野は言った。「この世界の悪意なんだ。この世界が存在するために必要成分でさえある悪意。空気みたいにね。その得体の知れないものは、僕らが何をやろうと無傷で生き残っている」そして桑野自身がその悪意に嵌まって、身動き取れなくなり、犯行に及んだのであった。人間が身動きできなくなる時、このときこそ人生の転換点なんだと、藤原は言うように思う。桑野もそうだったし、藤原自身もそうだった。

この学生運動の時代は、筆者も経験した時代だったが、歴史的に見れば、日本の戦後はこの学生運動を境に 1971 年の沖縄返還を持って終わったと思っている。同じ 1971 年、アメリカでニクソンショックが起こったが、これこそ戦後社会の終焉を世界に伝える出来事だったと筆者は考えている。そしてその後 1973 年のオイルショックを除いて、ほぼ順風な時代が流れて、日本はバブルへと突き進んで行ったのである。物語を通して、こうした時代を生き抜いてきた藤原伊織の人生観と彼の哲学が、余すことなく語られている。これは単なるミステリーではない。ミステリーな純文学である。少なくとも筆者にはそう思えた。最後に解かれて行く表題でもあるテロリストとパラソルの関係。園堂優子がニューヨークで作ったこの歌にたどり着く。物語の中盤で、島村が捜し求めた園堂優子の過去 22 年間の人生が、そこにはあった。意外性と蓋然性に満ちた、素晴らしい結論だった。

殺(アヤ)むるときもかくなすらむかテロリスト蒼きパラソルくるくる回すよ
藤原はこの歌をタイトルの根源とすべく、島村と優子の同棲時代に、この歌が大事な要素になることを予告している。つまり彼の 4 畳半の書棚には現代短歌集

が何冊か置かれており、優子がそれを読みふけるシーンが描かれているのである。優子はいわば島村から短歌を学び、ニューヨークでもそういうサークルに参加していた。しかしこの歌は5・7・5・7・7の短歌とは違って、7・7・5・7・8の配列となっている。いかにも形式にとらわれない優子の性格を物語っているところが、また何とも精緻な筋書きで感銘させられるのである。そしてこの歌が謎を解く上で、大きな要素になっていたのである。筆者は藤原にこの歌をどこから見つけてきたのか聞きたいと何度も思った。ノーテンキな彼の頭の中には、こんな歌を作るデリカシーはないと思っていたからである。もしこれが彼の頭脳の片隅から出てきたものであるなら、彼にはもう一つ芥川賞が与えられてしかるべきではないだろうか。と思った。ではこのテロリストとパラソルという相反する意味の二つの単語の組み合わせによって、藤原は何を訴えたかったのだろうか。筆者は藤原を思い出しながらこの問題に挑戦してみた。そして得られた結論は、テロリストといえども、恋に落ちた時は、ありふれた市井の人間に還る。そして無邪気になってはしゃぐのも、この世の中の真理だということ、訴えたかったのではなかろうか。それはひとえに桑野に限らず、島村もそして藤原自身も同じだ。と言いたかったのではないだろうか。ジャワカレーのCMに『大人、時々無邪気』と言うのがある(2015.06 現在)が、まさにこのナレーションとオーバーラップしてくる。藤原のハードボイルドにはしばしば自らの人生哲学の断片が、それとなく物語の中に挿入されており、それが物語を一層のことリアリティーあふれるものに変貌させているように見える。単なるアクションや、暴力に終始するのではなく、そこには人間愛や、人間とは何かという哲学までが語られている。【殺(ア)むるときもかくなすらむかテロリスト蒼きパラソルくるくる回すよ】これこそが彼の作品の主眼点であり、藤原作品としての真骨頂の一つと見ることも出来よう。

しかし藤原作品の中で圧巻なのは、長編 5 作目の『シリウスの道』だろうか。『テロリスト』では彼の青春時代が多く描き出されているのに対して、『シリウス』にはそれ以前、少年時代の藤原の姿と、さらに代理店勤務時代の彼の人間像が投影されているように見える。この物語は『テロリスト』の続編的意味合いも強く『テロリスト』の主人公島村がバーテンをつとめていた「吾兵衛」のオーナーには、あの経済ヤクザ浅井志郎が登場して、この店をあずかっている。したがって酒類の他にはホットドッグ以外に何も無い。そしてスレンダーな美人の脇役は主人公辰村祐介の上司である立花部長、もう一人は途中入社してまだ半年の現職閣僚の息子戸塚である。物語の大半は広告代理店で起こるさまざまなトラブルであるため、やや専門的なカタカナ用語が多く、慣れないと分かり難いが、そこは新人がうまく質問し、辰村が明快に答えているのですぐ理解できる。そしてここに得意先からいくつかの難題が持ち上がる。これを片付けてゆくのが、主人公辰村を中心にしたメンバー達である。そんなあるとき大スポンサー“大東電機”から、辰村が所属

する東邦広告銀座第四営業局を指名してのプレゼンテーションが求められる。後で分かったことだが、ネット証券を立ち上げるとのことで、証券業界にもネット証券にも明るくない部長以下のスタッフは、大慌てする。そしてかつて証券会社で営業窓口を勤めていたという女性平野を、急遽アルバイトとして雇う。ここから立花部長以下のスタッフが、目標に向かって、動き出すというのが中心ストーリーだが、ここに主人公辰村祐介のプライベートな問題が複雑に絡みながら物語は展開してゆく。

辰村は 38 歳で独身、高田の馬場のワンルームで暮らしており、酒をしこたま飲んだある晩、大阪に居た少年時代、絵の先生をしていた義父が描いた一枚の絵を、何気なく見るところから、物語は 25 年前にタイムスリップしてゆく。そこには近所の長屋に住んでいたトラック運転手の娘明子と、当時の親友勝哉、それに祐介が描かれていた。三人とも中学 1 年生、当時は祐介の父から絵を学ぶ仲良しだった。しかしこの三人の母親はそれぞれ家計を助けるために夜は働きに出ていたから、この時間帯は三人揃って近辺を探索する機会に恵まれていた。明子の父は交通事故を起こして以来、酒とパチンコにおぼれ、暴力を振るった。このため明子はいつも図書館へ避難し、ここで本を読んで過した。彼女はいつか天体に興味を抱き、冬、南の空に輝く『シリウス』について二人に説明し、シリウスはやがて 3 人の合言葉のようになっていった。

筆者は藤原の大学時代以前の話を知ることがなかった。いや聞いたかもしれないが覚えてない。筆者が東京近郊以外の土地に疎かったためかもしれない。しかしこのシリウスを読んでいると、彼の少年時代や、彼が育った大阪という町の全貌が朧気ながら見えてくるような気がする。鶴橋や玉造は現在では大阪の中心街であるが、今から 50 年前は、長屋はあってもビルのない町だったらしい。しかしこの境界の高津高校で藤原は自らの学力を磨き、合わせて酒やタバコ、そしてマージャンに競馬、あらゆるギャンブルの基礎を身につけたのだろう。『シリウス』では主人公は間もなく東京へ引越して行くが、藤原はこの殺風景な町を、夏の暑さと冬の凍てつく寒さを盛り込みながら、主な登場人物の人格を、そこはかとなく描き出してゆく。ここで藤原はこの少年時代へ戻りたいが、もうその術はないことをしばしば語り、夜空の星を見つめながら、少年時代を過ごした大阪の町に思いを回らせる。『テロリスト』でもしばしば語られてきた、時の流れの中で人は変わってゆくという概念を、この『シリウス』では、「人間関係はいつか必ず腐っていく。…」と立花女部長に言わせている。「腐っていく?」と辰村が聞き返すと、立花部長は「そう。腐っていくの、他人との関係なんて所詮、なま物なもの」と言った。この言葉こそ昔の自分と大阪で過ごした仲間たちに、素直に回帰できない辰村祐介の心を象徴するものであった。

あるとき辰村は運命の糸に手繰られて、明子の亭主に会うこととなる。明子は若かったころ梅田境界で偶然スカウトされて、やがて人気歌手となり、彼女を契約タレントとしていた前述の大東電機の御曹司に見初められて、所帯を持っていたのである。ところがこの亭主と明子は差出人不明の手紙で脅されていた。差出郵便局

が上野であるところから、辰村は上野にしばしば足を運んで、キャバクラや高級クラブで聞き込みを始める。アルバイトとして雇った平野がここ上野の路上で、似顔絵を描いてもらっており、この絵を描いたのはそのタッチから、かつての親友勝哉とも思えたことも気がかりだったのである。しかし辰村は上野のヤクザを侮ってひどく殴られた。それでも辰村は勝哉に会いたかった。明子と亭主が 25 年前の事件で何者かに脅迫されていた件を確認したかったのである。シリウスの 3 人しか知らないはずの事件を、犯人は詳しく知っていたから、このウラには勝哉が関わっているのではないかと、辰村は疑念を抱いていた。そしてかつてヤクザだった「吾兵衛」のオーナー浅井を訪ねた。上野界隈を取り仕切っているヤクザを紹介してもらうためである。辰村は明子と亭主が脅迫されている事実を隠して、これまでの事情をかいつまんで話した。浅井は、「だれにだって伏せておこなきゃいけないことはあるさ、けど四半世紀もありゃ、たいがいの人間は変わっちゃうぜ」と言った。辰村は、「たぶんね。けど、そうでない人間がいるかもしれない」と応じた。辰村は 25 年前の明子や勝哉が、昔のままの人間であってほしいと、心の底では信じていたかった。やがて浅井のはからいもあって辰村は勝哉が三ノ輪で小さな不動産屋をやっていることを突き止める。有限会社シリウスだった。祐介は勝哉に 25 年ぶりで再会する。しかし明子が「あのころがもどってきたらいいのに。どんなに貧しくても、あの時代にみんながもどいたらいいのに」と語っていた方向へ、すんなりと進むわけはなかった。『シリウス』の物語は心ではそれぞれが、昔に戻りたいと願いながら、人生は思い通りには行かないものと言わんばかりに、異なった方向へと進む。しかしそこには三人がシリウスの思い出を、誓い直すことを予感させるような希望が残る。そして辰村の人間関係は、運命に操られながら複雑に絡み合っただけで収束し、サラリーマンの悲哀を舐めるように結論へと向かう。どう進行するのか危ぶまれた物語は、大阪時代に登場した人物も、それぞれの役割を過不足なく果たして、シリウスへと進んでゆく。この物語でも藤原が経験した証券市場のさまざまなデータが紹介され、彼のバブル期の失敗は、見事に人生の経験として十二分に生かされている。藤原は人生は「賭け」と同様、何事も「経験」だと言っているようにさえ見える。

『テロリストのパラソル』は、1998 年フジテレビの金曜エンターテイメントで、萩原健一がアル中のバーテン島村に扮して、ドラマ化された。シナリオのような文体を見たとき、筆者もそう思ったが、ドラマ化はフジテレビの好判断だったように思う。同様に舘ひろし主演で『てのひらの闇』が 2001 年テレビ東京で、また『シリウスの道』が、没後の 2008 年に WOWOW でドラマ化された。『ひまわりの祝祭』および『雪が降る』もいずれドラマ化されることを筆者は期待している。

彼が病床について以来、抗がん剤の投与によって、一時、様態が奇跡的に回復して、しばらく経ったとき、筆者はお見舞いに行くつもりで、彼の携帯に電話をした。声は元気そうだったが、症状は必ずしも完治に向かっているわけでは、

なさそうだった。固形物は喉を通らず、もっぱら流動食が主になっているとのことだった。このため病院の管理下に置かれていたのである。にもかかわらず彼は「もう一作ぐらい作ろうと思ってるんだよ。今、構想練ってるんだ。」と笑った。それで見舞いに行くのをやめた。そちらの方を優先して欲しかったからだった。筆者は「それじゃ頑張ってくれ！」とって電話を切った。結局これが彼と交わした最後の会話になってしまった。それから3ヶ月後、彼の訃報に接することとなった。

彼の意識の中では死の恐怖も、死の暗いイメージも全くなかった。既に死を超越した彼のいつものノーテンキがそこにはあった。作家として死を乗り越えて、作品を描き続けなければと言う強い使命感の方が優先されており、そこには彼の人間としての誇りや尊厳が秘められているような、崇高ささえあるように見えた。藤原伊織没後の2007年7月に講談社から発行された『遊戯』の中に『オルゴール』という短編が、彼の遺作になって収録されている。

2007年5月17日、食道がんのため都内品川区の病院で藤原は妻や親しい編集者に見守られて世を去った。残念だった。多くのものが消えたような気がした。単に友人を一人失っただけではすまない、日本の大きな作家を失ったのだと思った。もう彼の新作は生まれることはない。あのスパイスの効いた小気味良い会話で展開する奇想天外なストーリーに触れることはできない。そしてテロリストとパラソルの短歌が、どこから湧いて来たのかを聞くことも出来なくなった。彼が若き日を過した“大阪の悪餓鬼次代”も同様である。もう藤原の冥福を祈る以外に道はなかった。



在りし日の藤原伊織。

ネット上にはいろいろな写真がある。しかし筆者の思い出の中にある藤原は、すまし顔でキリッとタイを締めた背広姿よりも、むしろこんな飄々とした風貌と、洗い晒しのよれよれのTシャツ姿だった。

思えば親入社員の時代から35年余り、これが藤原との付き合いだった。いつも明るくて陽気で、誰に対しても「ノー」と言わない男だった。どんな逆境にも負けない男だった。賭け事が大好きで、よく研究もしたし強かった。バブル期の株式投資以外に、彼が大負けしたことは聴いたことがない。でもこれは『テロリストのパラソル』を上梓したことで、見事に逆転を果たした。そんな彼もガンという病には勝つことが出来なかった。友人を誘って葬儀への参列を考えていたが、葬儀は近親者だけで密葬が行われて、彼の波乱に満ちた生涯が終わった。人生の紆余曲折を経てたどり着いた平穏な日々は、12年しか続かなかつた。59歳の若さだった。子供はなく真知子夫人だけが遺された。

筆者は藤原の携帯電話番号を今でも自分の携帯に保存している。ここを押せばまた彼の元気な声が聴けるような気がしているからだ。いつも5月17日にこの番号を押したくなるが、この携帯はもう彼には繋がらない。